



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	序文：ポストコロナの科学技術コミュニケーション
Author(s)	川本, 思心
Citation	科学技術コミュニケーション, 29, 95-99
Issue Date	2021-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82475
Type	editorial
File Information	JJSC29_095-099_KawamotoS.pdf



小特集 2

ポストコロナの科学技術コミュニケーション

2019 年末からの新型コロナウイルス感染症の世界的大流行によって、改めて科学技術コミュニケーションへの社会の期待は高まった。本誌『科学技術コミュニケーション』も学術的な側面からこの期待にわずかでも応えるべく、緊急小特集「新型コロナウイルスの世界的大流行と科学技術コミュニケーション」を企画し、2020 年 4 月から 11 月まで、序文を含めて 7 本を第 27 号および 28 号に掲載した。

そしてさらに今回、2021 年 3 月 13 日に開催された、北海道大学 CoSTEP 修了式特別プログラム記念講演「ポストコロナの科学技術コミュニケーション」を収録し、第 29 号の小特集とするものである。この序文では、緊急小特集の総括をするとともに、本小特集の趣旨と概要をまとめることで、科学技術コミュニケーション研究の現状と、科学技術コミュニケーションへの期待を確認する。

1. 新型コロナウイルス緊急小特集の総括

2020 年 4 月 8 日に、本誌は「科学技術コミュニケーションの観点に則った事態の把握、分析、提言や解決に資することを目的に、関連する論考を募り、可能な限り速やかに公開することを目指す」ために、緊急小特集「新型コロナウイルスの世界的大流行と科学技術コミュニケーション」を企画することを発表した(川本 2020)。そして第 27 号と 28 号にて順次関連論考を掲載した。

この緊急小特集では、迅速な公開と学術誌としての質の担保を両立するために、短期間での査読を行う、いわゆるファストトラックシステムを採用した。また号としてまとめて公開するのではなく、受理され次第、順次 pdf で公開するという手順をとった。その結果、序文(川本 2020)と寄稿(内村 2020)の他に、約 7 ヶ月間の間に 7 本の投稿があり、5 本が査読付きノートとして受理・掲載された(調他 2020; 吉澤 2020; 種村 2020; 室井他 2020; 木村他 2020)¹⁾。

JJSC がこれまで掲載してきた第 1 号から 28 号までの 309 本²⁾の中では、緊急小特集の 7 本の総ダウンロード数(順位)と、掲載からの月当たりダウンロード数(その順位)は、川本序文 2,945(50)/196.3(6)、内村寄稿ノート 9,713(2)/647.5(2)、調ノート 5,713(8)/380.9(3)、吉澤ノート 3,046(48)/203.1(5)、種村ノート 2,913(55)/224.1(4)、室井ノート 1,530(166)/139.1(7)、木村ノート 875(233)/97.2(13)となった。これらの数字は、これまでの JJSC 掲載論考より明らかに早い速度で閲覧されていることを示している。社会のニーズにあわせて緊急小特集を企画できた成果といえるだろう。興味深いのは、どのノートも公開 1~2 月間はダウンロード数が多いものの、その後は大幅に低下した点、そして、10~1 月と 5 月に再び増加傾向を示した点である(図 1 右)。奇しくもこれらは第 3 波と第 4 波の時期に該当している。このこと自体、更なる検証の対象となるが、感染の拡大とともに再び関心が高まったとも推測できるだろう³⁾。また、価値ある論考を公開しアーカイブする意義を再確認できた。

7 本の内容は、科学技術コミュニケーションが扱う分野の多様さをそのまま表したかのような陣容となった。なお、本誌以外の学術誌・専門誌でも「COVID-19 と科学技術コミュニケーション」に関係する特集が数多く組まれている(表 1)⁴⁾。簡単に研究内容の傾向を述べることはできないが、比較的編集方針が近いと思われる Journal of Science Communication ではソーシャルメディアに関する論考が多いと報告されている(Massarani *et al.* 2021)。パンデミックというひとつのテーマに多くの人が取り組んでいるこの機に他誌の動向を知り、科学技術コミュニケーション研究の発展に

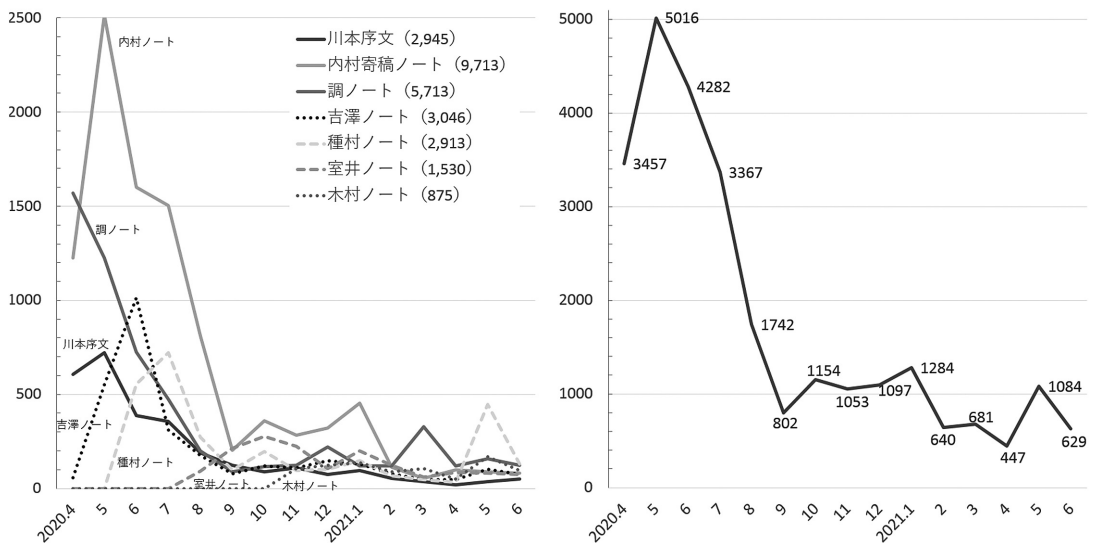


図1 緊急小特集7本の月ごとのダウンロード数。左は個別、右は合計のダウンロード数。

表1 COVID-19と科学技術コミュニケーションに関連する学術誌・専門誌の特集

発行年月	特集タイトル	掲載誌・巻・号	本数*
2020年	新型コロナウイルス感染症の世界的大流行と科学	科学技術コミュニケーション, 27; 28	7†
4-11月	技術コミュニケーション		
6月	新型コロナウイルス感染症と科学的助言	岩波 科学, 90 (6).	9
9月	COVID-19 and science communication: Part I	Journal of Science Communication, 19 (5).	13†
10月	新型コロナウイルス感染症とコミュニケーション	岩波 科学, 90 (10).	9
10月	Communicating Risk and Uncertainty in the Face of COVID-19	Science Communication, 42 (5).	8†
11月	特集 COVID-19	日本内科学会雑誌, 109 (11).	20†
11月	コロナ禍における福祉の現状と対応	月刊福祉, 2020年11月号.	8
11月	Public Health Communication in an Age of COVID-19	Health Communication, 36 (1).	14†
12月	COVID-19 and science communication: Part II	Journal of Science Communication, 19 (7).	12†
2021年	新型コロナウイルス感染とアーカイブ	デジタルアーカイブ学会誌, 5 (1).	9†
1月			
3月	コロナ時代の自殺対策	公衆衛生, 85 (3).	8
3月	COVID-19 Emergency Transition to Remote Learning	Online Learning, 25 (1).	21†
4月	Humor in the Age of Coronavirus	HUMOR, 34 (2).	8†

*序文やエッセイなどすべてを含む数

†オープンアクセス(元からオープンアクセスのものも含む)

繋げることも重要であろう。

最後に、編集方針について総括する。緊急小特集では査読付きとすることを重視したが、投稿数は必ずしも多くはなかった⁵⁾。日本の学術としての科学技術コミュニケーションの層の薄さを考慮すれば、有識者に寄稿（査読無し）を依頼した方が良かったのかもしれない。寄稿の場合でも編集委員会とやり取りで加筆修正が行われるため、質の担保はある程度なされる。また事前の打ち合わせによって修正の手間と時間も査読より減ることは大いにありうる。

今後、緊急に生じた事態を扱う場合は、寄稿により迅速に論点整理・情報発信を行うとともに、適切な期間において小特集の論文を募集するという2段階構えが適切かもしれない。予備的な分析に過ぎないが、前述したようにニーズは確実にある。書き手が足りない、あるいは発表する場への適切な誘導がないという課題に対して、JJSCが効果的に貢献できる余地はまだあると考えられる。なお、本緊急小特集に限らず、ノートや報告を査読なしとして、編集委員による閲読にするほうが良いのではないかというアドバイザーからの提案もある(吉澤 2020a; 加納 2020)。この点も引き続き検討が必要だと思われる。

2. 記念講演「ポストコロナの科学技術コミュニケーション」

現在進行形で進む新型コロナの問題は、社会一般において重大な関心事である一方、その対応にあたる専門家の活動の困難さは見えにくい。また、科学技術コミュニケーションの改善には、それを担おうという人々や関心がある人々と問題を共有し、何が求められているかを確認する必要がある。そのため北海道大学 CoSTEP は、2020 年度修了式の特別プログラムとして記念講演「ポストコロナの科学技術コミュニケーション」を企画し、2021 年 3 月 13 日(土)にオンラインにて一般公開で開催した(主催:北海道大学 CoSTEP 主催、共催:物質科学フロンティアを開拓する Ambitious リーダー育成プログラム)。

まず川本思心 CoSTEP 部門長が講演の趣旨とともに挨拶した後、京都大学 大学院医学研究科の西浦博教授から「今、そしてこれから何が求められるのか」と題したビデオメッセージが放映された(西浦 2021)。西浦教授は、厚生労働省の新型コロナウイルス感染症対策 専門家会議のクラスター対策班の一員として、数理疫学の専門家として分析を行うだけではなく、記者会見等でメディアに対応し、さらに twitter でも発信をしてきた。それらの経験を踏まえ、科学と政治の幼弱な関係の中で将来の科学技術コミュニケーターに期待することを述べた。

次に、総合診療医・感染症で一般社団法人 Sapporo Medical Academy 代表理事の岸田直樹氏が「支え、つなげるための情報発信～地域の感染症コンサルタントの立場から～」と題して講演した(岸田 2021)。岸田氏は、札幌市の危機対策管理室で参与として札幌市の新型コロナ対策にアドバイスや評価を行ってきた。また感染症コンサルタントとして、北海道各地の病院で COVID-19 対応にあたってきた。そして毎日のように twitter で札幌・北海道の感染状況や対策を発信してきた。これらの事例を述べるにとどまらず、現在のコロナの問題にだけ視点を奪われることなく、薬剤耐性菌や、人口構成の変化による医療の需要供給の不均衡といった問題にも目を向ける重要性と、その解決におけるコミュニケーションの重要性について述べた。

最後に、北海道大学 大学院理学研究院の松王政浩教授が、両氏の講演と科学哲学の観点をふまえて、科学者や科学技術コミュニケーターをふくめた社会の構成員の役割の再構築が必要であるとして、講演会を締めくくった(松王 2021)。

本公演はオンラインで約 160 名が視聴したほか、概要は新聞でも報道され(天野 2021; 佐藤 2021)、関心の高さが伺えた。

3. まとめ

記念講演が実施された日の 10 年前、2011 年当時、東日本大震災による甚大な被害をうけた被災地では懸命の救助活動が行われ、福島第一原子力発電所でも 1 号機に続く水素爆発を防ぐべく、必死の作業が行われていた。そのような状況の中で、科学技術コミュニケーションの必要性が叫ばれ、同時にその足りなさが批判された。その批判にどう応えるかが日本の科学技術コミュニケーションの課題のひとつと言っても過言ではない。それから 10 年後の現在の現状はどうかと言えば、やは

り十分とは言い難い。しかし緊急小特集のダウンロード数の多さや、記念講演の内容と反響の大きさを踏まえれば、科学技術コミュニケーションへの関心と期待はやはり高いと理解し、一層の地道な努力をすべきだろう。

「ポストコロナ」の時代はコロナ終息後から始まるのではなく、コロナ発生後から既に始まっている。しかし、その問題の様相は発生当初とは変化しつつある。また「コロナ」が前景化することで隠れてしまう問題にも我々は注意深く目を向けなければならないだろう。世界中が同じ感染症にさらされ、皆が当事者になりつつも個々に起きる状況は千差万別、というパンデミックがあらためて浮き彫りにしたのは、政治と科学の幼弱な関係、情報の拡散と分断、個と集団の価値・利益の対立であろうか。また、オンラインのコミュニケーションの急激な普及は科学技術コミュニケーションの手法に大きな影響をあたえている。この点については本29号のもうひとつの小特集をご覧頂きたい(種村2021)。

本誌では引き続き新型コロナ関連の論考を一般投稿として受け付ける。既に掲載されている論考への批判も歓迎したい。積極的に投稿していただければ幸いである。

文責：川本 思心(科学技術コミュニケーション編集委員)

2021年7月13日

注

- 1) 査読付きノート5本の受理日と査読期間は、調他ノート4月17日(8日間)、吉澤ノート4月28日(10日間)、種村ノート6月9日(33日間)、室井他ノート8月20日(58日間)、木村他ノート10月13日(99日)である。
- 2) 算出期間は、総ダウンロード数は2007年3月1日から2021年6月末まで。掲載からの月当たりダウンロード数は掲載月の初めから2021年6月末までとした。なお309本の中には目次や編集後記、奥付も含む。
- 3) 参考程度ではあるが、Googleトレンドによる「コロナ」検索数の波と、流行の波は概ね一致する。
- 4) 現在も募集中の企画もある。例えば、Journal of Communication in Healthcare: Strategies, Media, and Engagement in Global Healthの“COVID-19 and Health Inequities: Insights from Communication Research and Practice”は7月2日締切、International Journal of Environmental Research and Public Healthの“COVID-19 Global Threat: Information or Panic”は12月20日締切。
- 5) 7本という投稿数は、通常時の一般投稿数をふまえれば若干少ない程度の数といえる。ちなみにJournal of Science Communicationの特集向け投稿数は133本であり、2019年の全投稿数の136本と比較している(Massarani *et al.* 2021)。和文誌と英文誌を単純比較してはいけませんが、それでも日本の科学技術コミュニケーション研究発展への尽力がまだまだ足りないと思わざるを得ない。

文献

- 天野彩 2020:「感染防ぎ情報、どう伝える 専門家2人がオンライン講演」朝日新聞 2021年3月23日北海道総合28面。
- 加納圭 2020:「JJSC27号アドバイザーコメント」2020年9月14日 <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/news/14335> (2021年7月13日閲覧)。
- 川本思心 2020:「緊急小特集序文: 新型コロナウイルス感染症の世界的大流行と科学技術コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』27, 3-8。
- 木村祐哉・亀島聡・伊藤直之 2020:「新型コロナウイルス感染症がペット飼育者にもたらす心理・社会的困難」『科学技術コミュニケーション』28, 29-38。

- 岸田直樹 2021: 「支え、つなげるための情報発信～地域の感染症コンサルタントの立場から～」, 『科学技術コミュニケーション』 29, 107-125.
- 松王政浩 2021: 「講演会総括: ポストコロナにおける科学技術コミュニケーターの姿勢と覚悟」『科学技術コミュニケーション』 29, 127-130.
- Massarani, L., Murphy, P., Lamberts, R. 2021: "COVID-19 and science communication: a JCOM special issue", *Journal of Science Communication*, 19 (5).
- 室井宏仁・奥本素子 2020: 「COVID-19 感染拡大下における博物館施設のオンライン発信の傾向と分析」『科学技術コミュニケーション』 28, 1-10.
- 西浦博 2021: 「今、そしてこれから何が求められるか ～COVID-19 対策に関する科学技術コミュニケーションの経験から～」『科学技術コミュニケーション』 29, 101-105.
- 佐藤圭史 2020: 「北大オンライン講演 コロナ「事実淡々と」医師ら情報発信の在り方語る」北海道新聞 2021 年 3 月 14 日朝刊 17 面.
- 調麻佐志・鳥谷真佐子・小泉周 2020: 「システム思考による新型コロナウイルス感染症対策の可視化: 政府・専門家会議が検査を増やすことができなかった「理由」」『科学技術コミュニケーション』 27, 23-32.
- 種村剛 2020: 「新型コロナウイルス感染症抑制のために個人の行動を追跡することの是非: コンタクト・トレーシングアプリの社会実装に関する対話の場のための覚書」『科学技術コミュニケーション』 27, 41-53.
- 種村剛 2021: 「小特集序文: オンラインを用いた科学技術コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』 29, 3-4.
- 内村直之 2020: 「「新型コロナウイルスを考える」を考える」『科学技術コミュニケーション』 27, 9-22.
- 吉澤剛 2020a: 「JJSC26 号アドバイザーコメント」『科学技術コミュニケーション』 2020 年 4 月 16 日 <https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/news/14343> (2021 年 7 月 13 日閲覧).
- 吉澤剛 2020b: 「見えざる王冠: ノルウェーにおける新型コロナウイルスをめぐるパブリック・コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』 27, 33-39.